

「放射線安全管理 功労表彰と3人の師」



弊社特別顧問
豊田 亘博

1. 出会いと機会

先ごろ、平成18年度の放射線安全管理功労者として表彰していただいた。111年前にレントゲン博士がX線を発見したその日にちなむ、昨年11月8日のことである。今回私が受賞にあずかったのは誠に名誉なこと、人の縁の不思議ということをつくづく感じている。これまでの歩いた道を振り返りながら、私が師と仰ぐ三人の方々について触れてみたい。

2. 原研高崎と町末男博士

最初の師は23才のときに出会った町末男博士である。先ごろまで原子力委員会の委員を務められた町博士は、当時日本原子力研究所の高崎研究所におられた。同研究所では放射線化学の工業利用を目指して幾つかの官民協力によるプロジェクトが進行中であった。

大学を卒業して、昭和40年に住友化学へ入社した。それから1年しか経っていない新入社員同然の私に、日本原子力研究所の高崎研究所へ派遣という社命が下った。武久正昭博士と町末男博士が率いる「エチレンの放射線重合プロジェクト」には国内の数社の化学会社が研究員を送り込んでおり、住友化学からも派遣研究員の交代メンバーとして私に白羽の矢が立ったものである。

大学時代に宇宙物理を専攻したと聞いて、町博士は果たして私にどのような仕事をさせたものかと最初は戸惑われたに違いない。それでも私が希望して持ち出した「ポリエチレンの重合中の結晶化」という研究テーマについて、静かに耳を傾けてよく話を聞いて理解を示された。研究の成果を学会で発表する前に行われたリハーサルでは、スライドの内容から効果的な話し方まで、具体的に指導を受けた。そのときに学んだ教訓は、その後の会社生活においても役立ち、今でも生きている。

町博士は原研高崎の所長を務められたあとIAEAの事務局次長として活躍され、帰国後も

原子力産業会議のアジア原子力協力フォーラムを主導して原子力と放射線の利用と普及に尽力された。

「折々に書かれたものや、話の内容をまとめて本にして下さい」

と、以前から勧めてはいるのだが、前へ前へと進んでいてとても後ろを振り返るような時間的な余裕はないのであろうか、笑って答えられない。このたび3年間に亘る原子力委員の大役を終えて肩の荷を降ろされた町博士にはこれまでの活躍や考えてこられたことを是非とも記録に残して、後に続く若い世代に伝えて欲しいものだと思っている。

3. 米国留学とブンダーリッヒ先生

2番目の師は昭和49年に社会人留学生として米国に渡って指導を受けたブンダーリッヒ教授である。すでに「高圧下でのポリマーの結晶化」で名声の高かったブンダーリッヒ先生はニューヨーク州の片田舎にある私立の工科大学の看板教授であった。その名前からも判るとおりドイツ生まれの科学者である。第二次大戦後、共産圏に組み込まれた東ドイツのベルリンを逃れ自由の天地を求めて、化学者であった父君とともに家族でアメリカに亡命した。

渡米から間もない頃に、かつて原研高崎時代にやった仕事を研究室内のセミナーで話したら

「Journal of Polymer Scienceに掲載されたその論文で、君がここに来る前からToyotaとMachiの名前は知っていたよ」

とにっこりして言われた。ブンダーリッヒ先生は、その専門誌のレフリーでもあった。

日本では車も持たず運転の経験もなかった私は、米国で運転免許を取得する必要に迫られた。そのことを知った先生は私の中古車の購入から運転の指導まで、親身になって助言して下さいました。ドイツ生まれらしい合理的な精神と暖かな人柄に日々接して、学ぶことの多い毎日であった。アメリカで生活した若い頃の笑いと涙の日々については最近、家人が『花と遊んでときどき仕事』というエッセイに詳しく書いている¹⁾。

ブンダーリッヒ先生ご夫妻は大の親日家で、学会などで来日された折には京都のお寺や庭園を訪ねるのを楽しみにしておられる。私たち夫婦もご案内を兼ねてご一緒することが多い。先生の旺盛な好奇心は70代の半ばを過ぎててもなお衰えるこ

とを知らず、研究と教育に情熱を傾けて世界を飛び回っておられる。

4. 放射線取扱主任者部会と久保寺昭子先生

米国留学を終えた昭和51年にもとの古巣の住友化学・中央研究所に戻った。ほどなく、住友化学が外国の企業と合弁で設立した日本メジフィジックスへ出向せよという社命が出た。同社は診断用の放射性医薬品を生産・販売する会社で、創立してからまだ日が浅かった。英語のできる技術畑の者ということで、山岡社長の名指しによるものであった。これが放射線管理の世界に私が本格的に足を踏み入れるきっかけとなった^{2)、3)}。

社内において放射線管理の仕事をこなすかわら、日本アイソトープ協会・放射線取扱主任者部会の関西常任委員会の末席に名を連ねることとなった。当時の関西常任委員会の活動については委員長だった真室哲雄先生が「私のRI 歴書」に書いておられる⁴⁾。

京都大学原子炉実験所(当時)の辻本忠先生や大阪医科大学の高淵雅廣先生、それに今は故人となられた近畿大学の三木良太先生などと活発に議論しながらいろいろな新しい企画を立てた。日本アイソトープ協会・大阪事務所長の友定昭宏さん、その後を継いだ高田稔さんもまだ40代の働き盛りであった。

また、東京常任委員会の委員をしておられた小山田日吉丸先生や日本大学板橋病院の佐藤幸光先生とも年次大会の席で顔を合わせるなど、多くの知己を得ることができた。「ムーンライトセミナー」や「潮騒セミナー」と銘打って、関西で企画した泊りがけの研修会には東京から久保寺昭子先生も馳せ参じられ大いに盛り上がった。

今回、放射線の安全管理に業績があったとされたのは、当時の放射線取扱主任者部会での活動が認められたものである。その内容については「放射線管理の現場で体験したこと」と題して2年前、このFBNews誌に書いたこともあるので、ここでは触れない⁵⁾。

久保寺先生は私に教えた覚えは無いと言われるかも知れない。確かに私は久保寺先生の学生でもなく、また直接授業を受けたわけではない。それでも日本語には「私淑」という言葉がある。手許の辞書をひも解くと「ひそかにある人を手本として学ぶこと」とある。その意味において私が3番目の師と仰ぐのが久保寺先生に他ならない。

町末男博士、ブンダーリッヒ先生、久保寺昭子先生と3人の師は志の高さと意の強さ^{おもい}において、はるか高みを行く方々である。

5. 放射線取扱主任者部会・近畿支部長として

日本アイソトープ協会・放射線取扱主任者部会・近畿支部委員会の皆さんに背中を押されて、昨年からは近畿支部長を務めている。主任者部会の活動はともすれば大規模な事業所や大学などの研究機関の活動に主体がおかれがちである。一方、日常での放射線利用の場に眼を向けると、放射線を使っている事業所の数では病院など医療機関や中小の民間会社の方がはるかに多い。これらの小規模な事業所で孤軍奮闘している主任者を支援することで、主任者部会がその部会員にとって役立つ存在となり、今後の発展も期待される。

また、来年度以降の放射線安全管理功労表彰にあたっては、こうした縁の下での力持ちとして日夜、放射線の安全管理に尽力されている陰のひと達にも光を当てて発掘し、ご恩返しをしたいものと考えている。

引用文献

- 1) 豊田マユミ 『花と遊んで とときき仕事』牧歌舎(2005)
- 2) 日本メジフィジックス株式会社『日本メジフィジックス25年史』(1998)
- 3) 山岡静三郎 「わたしのRI歴書」Isotope News 2000年7月号 pp 16-20
- 4) 真室哲雄 「わたしのRI歴書」Isotope News 1995年6月号 pp 20-23
- 5) 豊田亘博 「放射線管理の現場で体験したこと」FBNewsNo.325, 2004年1月号 pp7-11

✪プロフィール✪

昭和18年広島県生まれ。昭和40年京都大学理学部を卒業。住友化学工業に入社、昭和52年まで中央研究所において研究開発に従事。その間、日本原子力研究所・高崎研究所に派遣、また米国レンセラー工科大学に留学(いずれも2年間)。昭和52年日本メジフィジックスに出向。放射性医薬品の生産と品質管理のかたわら放射線管理を担当。平成14年同社を定年退職し、千代田テクノルに入社。現在、同社特別顧問。日本アイソトープ協会・放射線取扱主任者部会・関西常任委員会委員(昭和56年～63年)、同部会・法令検討委員会委員(平成10年～16年)、現在、同部会・近畿支部長。